

開院30周年を迎えて



開院30周年を迎えて

2022年6月セント・ルカ産婦人科開院30周年を迎え、日ごろよりご支援をいただいております先生方や関連機関、大分の皆様に心より感謝を申し上げます。今後ともどうぞよろしくご願い申し上げます。

私が2002年に大分大学医学部産婦人科から当時大分市の津守富岡にあった当院に初めて手術の応援にきたとき、すでに開院10年経ってスタッフ一同が院長のもと理想の不妊治療専門病院を目指している気迫を感じたことを思い出します。当初より患者を中心にした医師（産婦人科、泌尿器科）、看護師、臨床心理師、胚培養士、事務が取り巻くチーム医療であるとの院長の考えから、スタッフそれぞれの立場で、激しい生殖医療の変化と進歩に対応しようとしてきた30年だったのではと思います。尽力されたこれまでのすべてのスタッフ各位、ご支援ご指導をいただいた皆様のおかげであり、今後ますます一層の充実を計っていく所存です。

2020年1月に日本国内で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認され、その後未曾有の打撃をうけて3年目となりました。コロナ前には、セント・ルカセミナーの開催や研究会、学会参加など国内外での勉強と多くの先生方にお会いできる機会と、季節のイベントのおかげで慌しく、しかし楽しく1年をこなしていったことが、今ではすっかり夢のときです。これまでの30年で毎年行ってきたこともこの数年は異常事態により同様の形では積み重ねることができないかもしれませんが、できる範囲でふれることなく行わなくてはと思っています。第一線で対応する感染呼吸器救急医療の方々、ともに携わっているの方々、研究者の方々のご活躍には本当に感謝しかありません。

そのような中、着床前胚異数性検査 (Pre-implantation genetic testing for aneuploidy: PGT-A) の大規模臨床研究が進行中です。日本の生殖補助医療 (ART) の環境は他国と異なり、38歳以上の高齢者が多くかつ提供配偶子治療が少ないため、また自然周期・低刺激周期 ART が多く、採卵周期当たりの妊娠率は世界一低くなっています。採卵は侵襲を伴うため治療効率を向上させるべく行われている計画的な調節卵巣刺激法は、確実に健全な胚を獲得し移植することに繋がり、効率の良い治療が行われることで安全と時間と経費の節約につながります。このコンセプトに基づく PGT-A に、2017年当院も参加しパイロットスタディが行われ、移植周期当たり妊娠率の向上および流産率改善を認めました。その結果を踏まえ、現在全国100施設以上が参加し妊娠数1,000例に達した時点で中間発表がなされ、その結果もまた同様の効果が認められました。特に高齢者に有効のようで、PGT-Aの結果を患者さんと検討していると、医療側はその外見はきれいな胚の「真実」が見えて今後の参考になり、患者さんは自分達の胚の「質」を客観的に知ることができて今後の治療の方向性を現実的に考える機会になるようです。何よりも治療時間の節約になり、PGT-Aの効果は単に妊娠率、流産率だけでなく、このような実臨床に与える深化のほうが高いように感じています。

2022年4月には不妊治療の保険適用が始まりました。当院では1996年から保険適用について署名活動を開始、全国の生殖施設に対し質問紙を配布し、2000年に元衆議院議員・前大分市長釘宮馨氏のご協力により当院院長の国会請願に繋がりました。2002年から2007年まで計5回の国会請願（署名46,729名）を経て、国が国会議員、厚生労働省担当者らとともに検討を重ねた結果、保険適用での対応は困難であり特定不妊助成金とし



医師
伊東 裕子

て治療費の軽減を図っていくことになりました。当院患者が受けた不妊治療助成金額は初回の2004年度には大分県および市を含め合計320名、4,640万円でしたが、2020年度は助成額の変更や助成可能な市町の増加もあり合計315名、1億3,767万円という助成がなされています。永きに亘り様々なことを検討して開始となった特定不妊助成金は多くの夫婦をサポートしてきました。準備期間1年半で開始となった保険適用は、色々な条件が制限としてのしかかって患者夫婦が困ることがあってはなりません。十分な検討と柔軟に対応しうるものでなければならず、生殖医療に携わる我々はその細かな部分の声までも届けて国からのより良いサポートとなるように働きかけていかなければならないと考えます。

30周年を迎え、院長のもとスタッフ一同、今後ますます動きのある世の中に対応できるよう日々取り組んで参りますので、引き続き皆様のご指導ご支援のほどをお願い致します。



大船山より坊ガツル 三俣山

開院30周年を迎えて



医師
津野 晃寿

セント・ルカ産婦人科がこのたび開院30周年の記念すべき日を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

宇津宮隆史院長は、永きにわたり日本の生殖医療の発展のために、常に先頭に立って牽引し多大な貢献をされてきました。長い間の勤労、本当にお疲れ様です。

また、当院をご支援・ご指導くださる諸先生方をはじめとし皆様方のご厚意により、当院の日々の診療業務は、円滑に行われております。改めて御礼申し上げます。今後も地域の生殖医療の中核として、皆様の期待に応えられるよう、さらなる発展が我々の責務であると考えております。

私がセント・ルカ産婦人科に来てから、ようやく1年がたちました。もともと伊東裕子先生と甲斐由布子先生とは、大学医局が同門である以前に小学校が同じでその頃からお二人を存じ上げておりました。院長とは私が大学病院に勤務していた旧病院の時に、医局派遣で手術の助手をさせていただいたのが最初だと思います。手術の外回りの看護師や胚培養師の方々がキビキビとされていて、院長を中心に統制がとれていたことが今でも強く印象に残っています。そのようなご縁もあり、2021年6月から常勤として日々の診療に携わらせていただいております。少しずつですが最近になってようやく日々の業務に慣れてきたように思われます。今後、セント・ルカ産婦人科スタッフの一人として微力ながら少しでも力になれたらと思っております。

今年はCOVID-19と不妊治療の保険適用につきる1年だったと思います。

新型コロナウイルス感染症によって、かつて経験したことのない甚大な影響を受けた年でありました。人類は長い歴史において幾度となく感染症の脅威にさらされながら、必ず乗り越えてきました。変異株に振り回されていますが、今は未来に向けての踏ん張りどころだと思います。私は新天地に異動するタイミングで、様々な天変地異を経験してきました。近年では2016年の熊本地震（まさに転居の最中で高速道路を運転中に車内のラジオで知りました）や2019年の北海道胆振東部地震（学会中で滞在期間中ホテルの電気・水が止まりました）などが思い出されます。

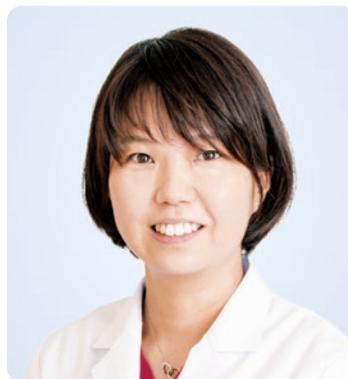
また、本年4月から不妊治療が保険適用拡大されました。治療の画一化に伴う医療機関間での費用格差軽減や費用軽減により若年者を中心に不妊治療に対する敷居が下がったなどの利点もあります。しかしながら、混合診療の禁止など保険診療に伴う治療の規制や制限にともない、本来、目指すべき個々の患者に適したオーダーメイド治療の選択や新たな治療法の開発・発展が難しくなるなる可能性があると思われまます。患者の不利益にならないよう質を下げずに新しい制度に適應していくことが重要になってくると思われまます。

院長におかれましては、日々の様々な業務の中、どんなに多忙でも、少しでも時間があれば、早朝（5時頃？）から山登りに行かれていることには、びっくりさせられます。私も早起きなほうで、早朝に来院することもあります。院長の車が駐車場にあったためしがありません。お歳ですのでお身体には十分お気をつけ下さい。

今後も多くの方に愛され、地域に「なくてはならない施設」として、ますますの発展を祈念するとともに、生殖医療のために引き続き末永いお付き合いの程よろしくお願ひ申し上げます。

開院30周年を迎えて

医師
甲斐 由布子



セント・ルカ産婦人科開院30周年を迎え、いつもご支援・ご指導くださる先生方、当院を支えてくださる職員さんや皆様方に御礼申し上げます。

院長が開院した頃には想像できなかったことが、この30年間でたくさん起きたのではないのでしょうか。世界的には顕微授精や胚凍結、着床前診断の技術がめざましく進歩しました。また当院も2011年、開院当初の津守から現在の大分駅南に新築移転しました。あの怖いほど静かだった大分駅裏が現在のように開かれ便利になるとは、30年前小学生だった私は思ってもいませんでした。不妊治療専門での開業や新築移転の即決など、院長の先見性には本当に驚きます。

ここ数年は新型コロナウイルス感染の流行で一時経済が止まり、経済的な不安や感染症の胎児への影響への不安感から婚姻件数が減少、少子化が加速しました。最近の研究によると、100年後には日本の人口は半減、40%が高齢者になるそうです。また最近「多様性」という言葉が色々な場面で聞かれ、ドラマなどでも様々なカップルが登場します。個人の多様性にも順応し今後の少子化社会を変えていくには、子どもを持ちたい、育てたいと希望してくださる方に、早い時期から一人でも多く適切な教育・情報や医療を提供することが大切だと思います。

一つの政策として、今春から不妊治療の保険適用が始まりました。最近当院でもさらに若い患者さんが増え、以前よりも多くの方が積極的に体外受精も検討しているようです。しかし実務面では、使用したい薬剤や技術が保険適用外など、様々な点で立ち止まることも多くなりました。とくに年齢の高い方、流産や体外受精の回数が多い方にとっては逆に費用が高くなることもあるようです。保険適用は数年をかけて改訂されていきますので、患者さんの声も聴きながら学会等へ働きかけていきたいと思っています。

私がセント・ルカ産婦人科に本格的に勤務を始めて、早くも7年目に入りました。仕事をしながらルカでお世話になり生まれた息子も、おかげさまで七五三を迎えました。少し閉塞感のある中でも日々力強く成長していく息子や甥を見て、大人だけの生活とは全く異なることを実感しています。同時に、これまで不妊治療を終結した方々のことを思い起すことが多くなりました。患者さんが治療を終えるとき、結果に関わらず後悔のない不妊治療を提供したい、その為には学会や研修会を通じて勉強を続けていきたいと思っています。

私も院長が開院した年齢に近付き、同級生でも開業する人が増えてきました。自分の船を一から作り海に漕ぎ出す大変さは、私の想像以上でしょう。昨年度から医局の体制も変化し新たな刺激となっていますので、院長が築き上げた当院を先生方・職員の皆さんと一緒に守っていきたく思います。院長にも「無事故」の休日登山で体力を保ち、我々への指導を続けていただきたいと思います。今後ともよろしくお願いたします。

開院30周年を迎えて

統括部長
師長
後藤 裕子



今年も1年を振り返る時期となりました。そして2022年の今年もセント・ルカ産婦人科も開院30周年を迎え記念すべき年となりました。近年は新型コロナウイルス感染症一色ですが、5～6年前の社会情勢はどうだったのかと思えば、世間は安倍政権のもとで安全保障関連法案の採否を巡り国論を二分したことや、世間で続発したテロや異常気象、マンションの杭打ちデータ流用などで人々が不安になった年でした。めまぐるしく変化する社会情勢を思い起こしていると同時に、セント・ルカ産婦人科そして生殖補助医療に自分の思いを馳せてみました。

1978年は60階建の超高層ビル「サンシャイン60」が開館し、24時間テレビ「愛は地球を救う」が放送開始された年でした。それと同時に小学生だった私の記憶に残っているもう1つの出来事は「試験管ベビーの誕生」でした。そのニュースを観たことは今も鮮明に覚えています。試験管でどうやって赤ちゃんが育つのだろう…と子どもだった私はそのような疑問を持ったものでした。しかしそのニュースは、子どもだった私に強烈な印象として残り、産まれた子どもの名前が「ルイズ・ブラウン」、成功した国は「イギリス」だと言う事は、いつまでも私の記憶に残り、大人になってからも忘れることのない出来事でした。今思えば、これまで私が歩んできた人生、そして私がセント・ルカ産婦人科で働いている事は、1978年の夏、私が記憶した時からからずと繋がっていたのだと思います。

イギリスで第1号の体外受精ベビーが誕生したのを皮切りに、世界的に生殖補助医療が展開され未だに日進月歩です。当院でも開院当時に行っていなかった「ICSI」も1994年に妊娠を達成し、約30年後の今では遺伝子・染色体のレベルにきています。そのような中で開院30年を経過していても、通ってこられる患者さんの悩みは変わりません。保険適用が開始され幾分費用に関する悩みは軽減したと思いますが、いつの時代も「いつ妊娠できるのか」「夫との関係」「仕事との両立」「自分の気持ちと医療の進歩のギャップ」など様々な問題が浮き上がります。初診時のオリエンテーション、なんでも相談、公認心理師のカウンセリング、これらを重点的に取り組み患者さんのケアに今後も取り組んでいきたいと思っています。私達は生殖医療の最前線で仕事をしています。その第一線に立つものがしっかりと看護を提供してはじめてその組織は評価されますが、日々の業務をこなすだけでいいことや、看護師個人が組織と結ばれていない現状が浮き彫りになっている…と以前、お伝えしました。今現在どうなっているのか…少しずつではありますが、組織と結びつき、総合力が出始めている事を感じます。よりよい医療を提供するには優秀な一人の看護師の力だけではなく、ひとつになった看護師全員の力が必要になります。

昨年、統括部長にも拝命していただき、今後は5年、10年と勤務体制や労務管理、人員配置の検討に取り組み、周りからしっかりと評価してもらえるような組織作りに取り組んでいきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

開院30周年を迎えて

総室長
後藤 香里



セント・ルカ産婦人科が開院して30周年を迎えました。私が入職した1999年、開院7年目には胚盤胞培養の技術すら無く、その時点から思い返すと、多くの技術が開発され、生殖補助医療はめざましい進歩を遂げています。

日本産科婦人科学会臨床研究である着床前胚異数性検査が始まって3年目を迎えます。

赤ちゃんが欲しいと切なる願いから、遠方より技術を求めて来られる患者さんもいらっしゃいます。流産を防ぐことや赤ちゃんを授かった患者さんがいる一方、毎回異数性胚のみしか得られない患者さんや正倍数性の胚を移植しても妊娠に至らない患者さんがいることも事実です。それでも今まで知り得なかった胚の状態を知れるということは、患者さんの気持ちを後押ししてくれているのではないかと感じます。

未曾有の事態である新型コロナウイルス感染症はこの生殖補助医療にも大きな影響を与えました。未知のウイルスが確認されたばかりの頃は胚移植を延期することが推奨され、海外ロックダウンの影響により物流が滞ることがありました。この感染症が確認されて3年が経とうとしています。感染症を防ぎながら、安定した治療を提供するため、多くの策を取り、変更を重ねてきました。いかなる未曾有な事態でも柔軟な対応が求められると思います。

私は2015年に大分大学大学院に社会人枠で入学させていただき、橋原久司名誉教授の下、河野康志准教授の指導を受けて博士の学位を取得させていただきました。大学院では子宮内膜が脱落膜化することによる機能変化について研究させていただきました。私は以前着床に関する研究について、京都大学名誉教授の森崇英先生よりご指導をいただきました。森先生は臨床における着床研究の必要性を熱心に伝えてくださり、そのお言葉が後押しとなり、大学院への進学を決めました。実際に自分の手で子宮内膜組織から得られた細胞を培養し、刺激を加え、刺激に対する反応を遺伝子やタンパク質レベルで検討し解析をする。私にはとても新鮮な経験で、世の中で知り得なかったことを最初に知れること、結果を基に考察することがとても楽しく、貴重な3年間を過ごすことが出来ました。その経験を礎に正倍数性の胚を移植しても妊娠に至らないなど、着床による妊娠不成功の原因を究明する研究を進めていきたいと思います。学ぶ機会を与えて下さった院長、ご指導いただいた先生方に感謝申し上げます。

ここ5年間の培養室の変化として、2019年に3人目として管理胚培養士の資格を取得させていただきました。そして新人スタッフが胚培養士試験に合格しました。セント・ルカ産婦人科が30周年を迎え、ここまで発展することが出来たのは多くの方々のご指導、ご支援の賜物と思っています。心より感謝申し上げます。今年の4月より保険適用が開始し、より多くの患者さんが来られるようになったのではないかと思います。いろんな不安や悩みを抱えて、少しでも早く授かることを願ってセント・ルカの門をたたいて下さっていると思います。その患者さんの気持ちに応えるため、最高の技術を安定的に提供できるよう、培養室一丸となり進んでいこうと思います。

開院30周年を迎えて

臨床心理士／公認心理師／
生殖心理カウンセラー／
がん・生殖医療専門心理士

上野 桂子



セント・ルカ産婦人科が開院してから30周年を迎えました。当院の心理相談室は2001年に開室して21年になり、当院の歴史の中で約3分の2を共に歩んできたこととなります。

開室当時、精神科を除いて医療現場、特に個人病院に心理士が勤務していることは大変珍しいことでした。当院は患者さんの心理的支援について開院当初から取り組んでいたとのことで、新しく入った私は院長先生やスタッフのご理解の元、不妊治療と患者さんの心理的問題について一から学びながらのスタートでした。

不妊治療を受けている患者さんの希望は「自分達夫婦の子どもが欲しい」という一点で共通していますが、それぞれの患者さんが置かれている背景や悩みは本当に様々です。不妊治療がまだ社会的に広く認識される前は、マイノリティとしての悩みについての相談がとても多くみられました。その後報道などで不妊や不妊治療が取り上げられ、今では有名人が自分達の経験を発信するなど情報が溢れるようになってきましたが、それに伴う悩みも増えてきたように感じます。

また、医療技術の進歩や時代の変化に伴い、夫婦間の子どもに限らない精子提供や卵子提供による妊娠・出産を希望する方々への支援の必要性が明らかになってきました。その方々のために、当院も参加しているJISARTでは2008年に厳密なガイドラインを設け、精子・卵子提供による体外受精を開始しました。私も倫理委員とフォローアップ部会長として、この医療で誕生した新しい形のご家族全員、とりわけ生まれて来た子ども達の真の幸福を願い、微力ながら今日まで関わらせていただいています。

このように時代の変化に伴い患者さんの悩みや不安も多様になってきましたが、夫婦関係や仕事との両立、流・死産に伴う悲しみなどは以前と変わらず患者さんの精神的辛さを引き起こしています。

それに加え、2020年から世界的に拡がったコロナ感染症により社会的な繋がりが薄れ、孤独感を抱く患者さんが多くなったように感じています。社会的な理解が得られるようになったとは言え、不妊に伴う悩みは誰にでも話せるものではありません。「辛い気持ちを話せるのは夫だけ」という方も多く、一人で悩みを抱えていると辛さは何倍にも感じられます。

色々なことで気持ちが落ち着かない時や孤独感に悩んでいる時に心理相談を利用して頂いた方からは、「久しぶりに思い切り胸の内を話せた」「話すことで気持ちが整理できた」との感想を頂いています。これからも不安な時や治療に迷った時、辛い気持ちになったときに気軽に相談できる場として利用して頂ける心理相談室でありたいと思っています。

近年医療現場で働く心理士の存在も社会的に認められ、公認心理師という国家資格もできました。当心理相談室でも、益々充実した相談室になるよう後継者の育成に努めたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

開院30周年を迎えて

副部長
越名 久美



2022年4月より受付から総務部に異動になり、事務長補佐、受付・情報処理室・厨房部門を総括するという要役を引き受けることになりました。総務部は事務長が所属していますが、スタッフとして総務部に配属されるのは私が初めてです。お話を頂いたとき、まず自分は何が出来るのか、病院がうまく回る為には何をしたらよいか考えました。現場に立たなくなって数か月経ったときに、不思議と院内全体が見えるようになり、今自分が何をしなければいけないのかがはっきりしてきました。まず受付部門は、部署長との連携を密にして、日々の進捗状況を確認し、不足している所があれば業務のサポートを行い、ルーチンワークのスムーズ化を目指したいと思いました。それと、教育の強化。現在受付は7名いますが、半分以上が入社2年以内のスタッフです。業務の内容と、気遣い、心配り・心遣い、心配り・目配りができる、患者さんの心に寄り添えるスタッフに育てたいと思いました。社会で生きている限り、気を遣うのは当然のことです。患者さんの言葉だけではなく、行為や表情からも読み取らなければいけません。また、気遣いや心配りなどは、スタッフ間でも必須になってきます。業務のスムーズ化に繋がる為にも、今後の若いスタッフに期待をしたいと思います。次に情報処理室ですが、今年人事の入れ替わりが激しく、今現在は入社3年目が1名と、新人1名が在籍しております。情報処理室の仕事は、年報の作成、院内のシステムの管理や出張の手配、出産された患者さんのデータの登録、予後調査などですが、こちらでは新人が一人前になるまでこの業務がうまく回るよう、業務を出来る限りサポートし、また新人教育も行っていきたいと思っています。厨房は、現在2名在籍しております。業務の効率化を図る為にも、細かく業務の内容を見直していき、2名体制のサポートをしていきたいです。

セント・ルカ産婦人科も30周年を迎えました。私も入社して27年が経ちます。

1996年不妊治療の保険適用に向けての署名運動を始め、5回の国会請願を経て、それが2004年助成金制度へ発展し、そして2022年ついに不妊治療が保険適用になりました。2011年7月新病院開院。2013年日本受精着床学会が別府で開催。初めて全国規模の学会を主催するという大変貴重な経験をさせて頂きました。システム関係で言えば、開院当初は「クリニベース」というデータベースがありましたが、1999年当院独自が開発した「Sarah Base」が完成。2003年受付の会計システムを導入。2017年体温表システム導入。今まで紙で管理していた患者さんの体温表がシステム化されました。そして、今年か来年あたりには電子カルテを導入予定です。このように、セント・ルカ産婦人科は今なお進化し続けています。いつも院長が仰っている『常に前向きに』という言葉。私もこの言葉を念頭に置いて、総務部として事務長を支えていき、また日々邁進して行きたいと思っています。

開院30周年を迎えて

主任
青木 桜



1992年6月3日開院から30周年を迎えました。大分で不妊治療と聞くとセント・ルカ産婦人科を知らない方はいないのではないかと思います。地域の根付いた病院だと日々感じます。病院の歴史から比べるとまだまだ短いですが、私個人では今年で8年目を迎えています。病院の開院から考えますと、開院時には私はまだこの世に誕生もしていませんでした。そんな私が、病院の30周年に立ち会えた事に身に余るものがあります。常に進化を遂げている不妊治療の分野で、入職からの8年間を振り返ってみました。

2015年に入職した私は、「不妊治療とは？」という無知の状態から始まりました。スタッフである私よりも、患者さんがより詳しい知識をもって、子どもが欲しいという切実な思いをもった患者さんが沢山いらっしゃいました。不妊治療の技術や研究が進む中、セント・ルカ産婦人科では院長の声掛けの元、不妊治療費の署名活動から始まり、国会請願が行われ、2004年から特定不妊治療費助成金制度が開始されました。制度開始以降多くの方が利用し、全国でもトップレベルの助成制度となりました。2017年に行った助成金制度についての研究では、回数・年齢制限を無くしてほしい、出産毎に回数制限をリセットしてほしいという患者さんの声があり、また、回数制限がきた時に治療を継続しますかという問いでは、40.2%の方が治療をやめると選択されており、不妊治療における経済面での負担はとて大きく、全国的にトップレベルの制度であるにも関わらず子どもを諦めるという選択肢をもつ患者さんがこんなにもいらっしゃるのだという驚きと悲しさを感じたことを覚えています。研究結果を大分県・大分市の御担当の方へお送りし、その後2021年には制度の見直しが行われ所得制限の撤廃、助成額は41万円と増額、回数制限はあるものの1出産毎に6回という制度の改善が行われました。大分県・大分市の御担当者の方をはじめ、この30年の中で院長が始めた署名活動が、こんなにも行政を動かし患者さんのためになっているのだと改めて感じました。この8年でも、不妊治療は確実に技術が進み、社会全体にも不妊という言葉が広がり、今や保険がきかなかった生殖補助医療分野は、2022年度より保険適用が開始されました。患者さんの経済面の負担は軽減され体外受精や顕微授精という高度な治療が3割負担で行えるまでになりました。今まで経済的な面から治療を行うことができなかった、ためらっていた患者さんの治療の選択肢が増え、年齢の若い患者さんにとっても治療のステップアップがしやすくなり、当院でも早い段階で治療のステップアップを希望する方が増えています。ただ、開始したばかりの保険適用には、年齢・回数制限が設けられていること、混合診療が禁止されている日本では保険適用内での医療しか行えないため医療の質の低下等、まだまだ問題は山積みだと感じています。また、患者さんがより良く制度を利用できるように経済面での説明を行っていかねばいけません。開院当初は3人しかいなかった受付スタッフも、今や7人体制となりました。開院後30年不妊治療の第一線で治療・研究してきた院長に負けぬよう、受付全員で知識のブラッシュアップを行い、これからも勉強・研究を続け微力ながら患者さんの力になれるよう日々研鑽して参ります。

開院30周年を迎えて

主任
魚住 真由美



本年、セント・ルカ産婦人科が開院30周年の記念すべき時を迎えたことを、スタッフの一員として大変うれしく思い、心からお喜び申し上げます。そして、寄稿という大役をいただき、30周年という歴史の深さと重みを感じるとともに、皆様とともにこの慶びを祝えることに感謝いたします。

私が所属する情報処理室は今年で25年を迎えることとなりました。この記念誌を発行するにあたり、過去の年報や記念誌を読み返してみると、この30年間、諸先輩方のご尽力により常に発展してきたことが窺い知れます。

入社して3年目の私は経験していませんが、当時、当院のシステムは「クリニベース」というシステムを導入していたそうです。1994年に「クリニベース」に蓄積したデータを統計処理するための「クリニスト」を開発、1997年には「SarahBase」の開発に着手し、1999年に運用開始、2001年には「新 SarahBase」開発のためのプロジェクトを立ち上げ、2002年に開発開始、2003年には本格的に稼働を始めマイナーチェンジを繰り返し、現在の「SarahBase」が出来上がったそうです。「会計システム」「予約システム」の導入、そして診察の元となる「電子体温表」の導入など、30年間、前へ前へ進み続けています。

現在とはいうと、電子カルテを導入すべき IT 委員会を立ち上げ、既存の「SarahBase」との連携ができる電子カルテを選定中です。不妊治療という特殊な治療を行うにあたり、電子カルテに望む項目が多数あり、なかなか一筋縄ではいかないのか、私が入職する前から電子カルテについては話し合いが持たれてはいるものの、「SarahBase」との連携や、1患者1IDではない当院のシステムを受け入れてくれるメーカーが少なく困難を極めている状態でした。そのうえ、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で、自粛や制限のなか、メーカーとの話し合いが一時中断したり、思うように進まない状況が続いていました。7月に入り、なんとか前に進むべく、コロナ禍で中断していた当院のシステムと連携可能な電子カルテのメーカーのデモを行うことにより、懸念されていた問題点もクリアできるのではと、少し光が見えてきたように感じています。私自身、前任者より引き継ぎ、IT 委員会に携わるようになって半年ほどです。前任者が、切り開いてくれていた道を整備しつつ、業務の効率化、診療データの解析、医療サービスのさらなる向上を目指し、電子カルテの導入を実現させたいと思います。

私事ではありますが、2022年に入り情報処理室のスタッフ2名が退職し、ほんのわずかな期間ですが3名で対応していた仕事を1人で対応しなければならなく、いっぱいいっぱいの毎日でした。ちょうど、不妊治療が保険適用になることで、他部署も対応に追われている中、情報処理室のことも気にかけて下さりなんとか切り抜けることができましたこと、ここで感謝申し上げます。程なく、新人スタッフが2名入社し、勤務歴僅か2年半の私が新人スタッフ教育することとなりました。まだまだ自分自身、ルカの一員として役に立つ存在になれているのか不安もありますが、新人スタッフ共々更なる高みを目指してスキルアップし、まだまだ続くルカの歴史に貢献できるよう日々精進してまいります。

開院30周年を迎えて

主任
矢野 千恵美



自然な日常がコロナの渦に巻き込まれて3年の月日が流れました。

今年もルカの年間レクリエーションは停止状態です。栄養士も外でのセミナーは開催されず、オンラインで受講をしていた1年でした。

それでもルカを受診される患者さんの治療は変わりなく止まる事はありません。安静入院されている患者さんは、入院当初は完食されていてもあまり動けないので、お腹もすかず食の量は減っていきます。そのような患者さんの容態をナースとの連絡で把握し、少しの事でも対応してあげられるように、取り組んでおります。

先日私の姪から、友人がセント・ルカに入院して治療を受けたら自力で妊娠できた話を聞かされました。「入院中のご飯が美味しかったよ」と言われたので、私の事を自慢したそうです。私は「キャー、恥ずかしい」と言った反面、ルカのご飯パワーも少しはあったのかなと自負してしまいました。

人間の体を作る栄養素、たんぱく質・糖質・ビタミン・ミネラルこれらが、バランス良く作用して人の体は作られています。このバランスが壊れると体に少しずつ不具合が生じ、体調が崩れていくのです。入院している間の食事で、患者さんに食品中の栄養を見直す時間も持たせてあげられたらいいかと常に思っています。

セント・ルカは、今年開院30周年です。あの頃、下郡バイパス沿いにカタカナ名の産婦人科が開院したと、当時大分では珍しく主婦たちの間で噂になっていた事を覚えています。

私は、22年前運良く、入職させて頂き、この記念すべき年に定年を迎えます。入職当初は先輩が2人、優しく丁寧に沢山の事を学ばせてもらいました。週に1度のフランス料理の日、セッティングから助手作業全てが新鮮で、感動でした。入職まもない頃、厨房の裏口から「おるかえ」と男性の声、そこに見えた顔は、私の小学校時代の校長先生！ セント・ルカの宇津宮院長は校長先生の宇津宮?! 私の頭の中はパニックで小学6年生の私にタイムスリップしていました。これも院長のおっしゃる神のお導きでしょうか。先生自慢の無農薬野菜を届けてくれていたのです。懐かしい顔を見る事ができ、毎日の緊張から少しだけ救われた気がしました。思えば月に1度のミーティングでの聖書の時間も気を引き締め直す、尊い時間でした。

東大道の新病院への引越し、皆の一致団結の力はお見事でした。別府ビーコンプラザでの第31回日本受精着床学会総会・学術講演会、世界に発信している院長の偉大さを痛感しました。このセント・ルカ産婦人科で仕事をさせて頂き、色々な経験・体験をしながら過ごさせていただけた事は、感謝でしかありません。

“人の心は、食で元気になる”今後も患者さんに寄り添い食で力になれるよう、後輩にも伝えていきたいと思えます。

事務長からのお礼

事務長
宇津宮 富美子



おかげさまで開院30周年を迎えることができました。これも皆様方のおかげと心より感謝しております。

30年前、大分県で不妊専門医療医院として不安いっばいの門出でした。院長以外はみなが不妊診療には素人というよい状態で、一つ一つのことが初めてのことだらけで、右往左往したものです。まず、林浩治会計事務所の林先生のご指導を受け、開院までの大分銀行からの融資、建築会社の選定、さらに全国で不妊専門施設を開業されていた先生方のご助言、大分医科大学の宮川勇生教授はじめ、大分の産婦人科の先生方のご指導により、やっと第一歩を踏み出せました。ここからすでに皆様の温かいお心に守られていたと、本当に感謝いたします。

事務長とはいえ、会計業務には何の心得があるわけではなく、ほとんど林先生に頼りっきりでした。また大変なのがスタッフに関する事務的業務でした。これもまた、初めてのことばかりで、豊田労務士事務所の豊田先生のご指導で、ハローワークに日参することもありました。

そのような中で、診療業務は徐々に成績を上げてゆき、大分県の患者さんに何らかのお役に立つ病院として知られるようになり、一安心していましたところ、院長の突然の病院の新築・移転の宣言で、またまた大変なことになりました。しかしその際もスタッフ、各関連会社の方々のお働きで院長の言う患者さんの気持ちに最も配慮した「理想的な病院」が完成し、また2年後には日本受精着床学会を別府市で開催する栄誉に恵まれました。この時のスタッフの方々、関連会社の方々のお働きはそばから拝見してとても素晴らしく、たくさんの先生方からお褒めの言葉をいただきました。

このようにこの30年間には思い出の尽きないほどの経験をさせていただき、またそれらすべてが皆様方のお支えによるものと感謝しております。

今後も微力ながら大分の生殖医療に貢献できるようにがんばりたいと思います。

皆様方のご指導、ご鞭撻をよろしく願いいたします。